

■ あと1本 ■

試合は終盤で大きく動き出した。夏の高校野球石川県大会2回戦、本校は8シード金沢商との初戦を迎えていた。小松にある弁慶スタジアムでは、乱打戦の第1試合がそれ以降の開始時刻を1時間近く遅らせていた。気温34℃の予報。暑さは尋常ではない。それでも、スタンドにはプラスバンドを含むバス2台の応援団、父母会、OBたちが多数陣取った。

第100回の記念大会。節目の大会に出会ったのは偶然でしかない。でも、どこか気持ちは高鳴る。何か起きる予感がある。校内壮行式での主将の「シード校を全力で倒していく」という決意を信じていた。

初回の表に3塁打で1点を先制された。この後も、毎回出塁を許す。しかし、要所を押さえ、追加点は与えなかった。本校も、出塁はするものの、もう1本が出ない。相手エースに7回まで無失点に押さえ込まれた。試合は1-0のまま、8回裏の本校の攻撃へ。

2死1塁で、4番打者が左中間を破る。3塁打。待ちに待った同点。しかも逆転のランナーは3塁にいる。あと1本出れば、逆転して相手の攻撃は9回表のみとなる。ベンチもスタンドも一気加勢に出た。しかし、1本はまたも遠かった。

同点で9回を迎えれば、延長を含めてこの先はひとイニングごとの勝負だ。追いついた勢いそのままにと願う。しかし、9回表2死2塁から、4連打で4点を失った。肩を落としかけたが、その裏、本校は2点差に迫り、なお1死満塁の好機に主将が打席に立った。2球目、1-2-3の併殺打。試合は終了した。

春の選抜甲子園大会で授与される紫紺の優勝旗には、「VICTORY」の文字。しかし、夏の大会優勝旗には、ラテン語で「VICTORIBUS PALMAE」（勝者に栄光あれ）と織り込まれている。「勝者」とは、誰を指すのか？ もちろん、第一に優勝チームだ。しかし、それだけではないように思えてならない。



朝日新聞の別刷り特集にこんな言葉があった。<県立野球場での開会式に／君たちは集う／グラウンドに立つ君も／スタンドで見つめる君も／その頭上に、／すでに栄冠は輝いている>。「あと1本」が出るか、出ないか。試合の行方は紙一重だった。そう考えれば、ひたむきに野球に打ち込んできた者は誰もが勝者だ。すべての高校球児に栄光あれ。